

インターナショナル・アカウンティングへの 再挑戦のための提言

藤田 晶子
明治学院大学

要 旨

国際会計研究学会（以下、「学会」という。）が1984年にわが国における国際会計研究の推進を目的に設立されてから20年あまりが経つ。その間、学会では、その設立趣旨にそって活発な活動をおこなってきた。しかしながら、会員のほとんどが、スタンダード・セッターでないために、学会報告などで発信しても直接にはIASBなど国際的な基準設定主体に届きにくい現状において、発信の効率性・透明性などを高めるために、ASBJまたはIASBなどにコメントおよび提言できるような学会内組織等の確立が必要との意見もある。学会はこれまでも年次大会および国際的な大会での研究発表や学会年報を通じてさまざまな提言をおこなってきた。にもかかわらず、このような指摘がなされるのは、なぜだろうか。本稿においては、まず、学会の目的や組織、資金状況についてなど海外における類似の学会と比較したうえで、学会の今後を展望することとした。

1. はじめに

国際会計研究学会（以下、「学会」という。）が1984年にわが国における国際会計研究の推進を目的に設立されてから20年あまりが経つ。その間、学会では、年次大会の開催や海外の学会・研究者との交流など、その設立趣旨にそって活発な活動をおこなってきた。なかでも、1990年代以降においては、統一論題のなかで会計基準の国際的調和化または国際会計基準の動向がテーマとして頻繁に取り上げられ、わが国における会計基準の国際的調和化問題についてとりわけ積極的に議論がなされてきたといえよう。

しかしながら、会員のほとんどが、スタンダード・セッターでないために、学会報告などで発信しても直接にはIASBなど国際的な基準設定主体に届きにくい現状において、発信の効率性・透明性を高めるために、ASBJまたはIASBなどにコメントおよび提言できるような学会内組織等の確立が必要との意見もある¹⁾。

学会はこれまでも年次大会および国際的な大会での研究発表や学会年報を通じてさまざまな提言をおこなってきた。にもかかわらず、このような指摘がなされるのは、なぜだろうか。研究内容が時代に即していないのか。研究成果のPRが十分でないのか。それとも、指摘のように、ASBJや国際的な会計基準設定主体に対する提言を通じて国際的な会計基準設定プロセスに積極的に関与していくべきなのか。

たとえば、アメリカ会計学会（American Accounting Association, 以下、「AAA」という。）についていえば、会員はアメリカ国内にとどまらずその国籍は世界各国にわたり、また、活動も年次大会の開催だけでなく

FASBやIASBにもコメントレターを提出するなど、国際的な影響力はきわめて強いといえる。もっとも歴史も規模も異なるAAAを学会の比較対象とすることには若干の問題もあるが、学会の今後を展望するさいに、AAAを含め海外における類似の学会との比較がなんらかの参考になりえるように考える。

本稿は、海外における類似の学会との比較・分析を通じて、学会として、インターナショナル・アカウンティングへの再挑戦のための提言をどのように考えていくべきかを検討する。本稿においては、まず、学会の目的や組織、資金状況についてなど海外における類似の学会と比較したうえで、学会の今後を展望することとしたい。

2. 国際会計研究学会の設立趣旨および目的とその国際的比較

そもそも学会は、その設立趣旨および目的の点で、AAAなど海外における類似の学会とは異なるのではなからうか。だからこそ、その活動内容も範囲も異なっているのではなからうか。まずは、学会の設立趣旨および目的という観点から、海外における類似の学会との比較をおこなうこととする。

図表1はAAA、カナダ会計学会（Canadian Academic Accounting Association, 以下、「CAAA」という。）、フランス語圏会計学会（Association Francophone de Comptabilite, 以下、「AFC」という。）、欧州会計学会（European Accounting Association, 以下、「EAA」という。）の設立趣旨および目的を要約したものである。

図表1 海外における類似の学会の設立趣旨および目的

学会名	設立年度	目 的
AAA	1916年	1) 会計研究の促進・支援, 研究成果の公表 2) 会計教育の発展 3) 会計上の諸概念・会計基準の発展, およびその外部公表財務諸表への採用状況の調査 4) 管理会計の発展 5) 会計知識の普及
CAAA	1976年	優れた会計教育・会計研究を推進
AFC	1979年	1) 会計研究・会計教育に従事するものの交流促進 2) 会計知識の発展と普及 3) 類似の目的を有する国際機関との関係促進
EAA	1977年	欧州会計研究の促進・ネットワークの拡大

学会の目的は「国際会計の研究を推進すること」(会則第2条)であり, そのために年次大会における研究発表および年報など刊行物の発行などを主たる事業として活動をおこなうこととしている(会則第3条)。すなわち, 学会は, これまでの活動内容からしても, その会則に準じて着実に事業をこなしてきているといえよう。

他方で, 図表1からわかるように, CAAA や AFC, EAA などが学会とほぼ同様の目的を掲げているのに対して, AAA においては, その目的が多岐にわたり, 理論面だけでなく会計上の諸概念・会計基準の発展など制度面にもおよんでいる。このように AAA の目的が制度面までにもおよんでいる背景には, AAA が, その長い歴史のなかで, 会計原則および会計基準の設定に自らが携わってきた経緯があるからだと推察されうる。

3. 国際会計研究学会の組織とその国際的比較

学会の目的が異なれば, 当然のことながら,

その組織も異なるだろう。

学会が理事会を頂点とした単純な組織構造であるのに対し, 図表2からわかるように, AAA・CAAA は研究分野別・地域別・委員会別に縦横に下位組織が設けられている。もっとも, AAA・CAAA が会計全般を扱うのに対して学会が国際会計という会計のなかの1つの研究分野のみを対象とする学会であるという点, AAA・CAAA と学会とでは会員総数の点でも資金の点でも規模が大きく異なる点等を勘案すればこの違いは当然のことと思われる。

下位組織のなかでも分野別または地域別については, いずれの活動内容も大会やミーティングの開催, 雑誌やニュースレターの発行など学会の活動内容と基本的に変わらない。AAA・CAAA の場合には規模が大きいため, 分野別または地域別の細分化はやむをえないように思える。

しかしながら, AAA・CAAA が採用している委員会(Committee)方式は, 研究面はもとより組織面でも必要に応じて各分野の専門家を中心に委員会を設置するものであり,

図表 2 海外における類似の学会の組織構造

学会名	下部研究組織
AAA	1) SECTION……IAS (International Accounting Section) 等計 15 2) REGION 3) COMMITTEE……Financial Accounting Standards Committee 等
CAAA	1) CAR (Contemporary Accounting Research) 2) CAP (Canadian Accounting Perspectives) 3) COMMITTEE……Exposure Draft Committee Financial Accounting Committee Management Accounting Committee Audit Committee 等

急速に変化する研究環境にも機動的に対処できるような組織運営を可能にしていると考えられる。

これら種々の委員会のなかには、会計基準設定主体より公表された公開草案などに対しコメントレターを作成・送付する業務を担っている委員会（AAA の場合には Financial Accounting Standards Committee, CAAA の場合には Exposure Draft Committee）もあり、テーマごとにその分野に精通した会員が当該委員会のメンバーとなり、客観的な立場から議論がなされている。

今後、学会がどのような提言をどのようにおこなっていくのかはさまざまな意見があるだろうが、いずれにせよ、委員会方式を採用するのも学会の組織力強化に向けた方策の 1 つと言えるかもしれない。

4. 国際会計研究学会の財政状態とその国際比較

AAA・CAAA のような強固な組織を維持し、かつ豊富な人材を活用するには、膨大な資金が必要になると思われる。AAA・CAAA はどのくらいの資金をどのように調達しているのだろうか。

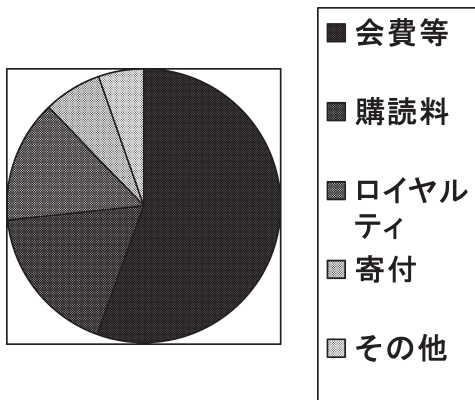
学会については、その運営は主として会員からの学会費で賄われており、その額は年間 260 万円程度である。この年間収入額は年次大会の開催と年報の発行を賄うだけでも必ずしも十分とはいえない額である。

他方で、図表 3 および 4 からわかるように、AAA・CAAA の資金調達源泉はいずれも多岐にわたり、その額も膨大である。

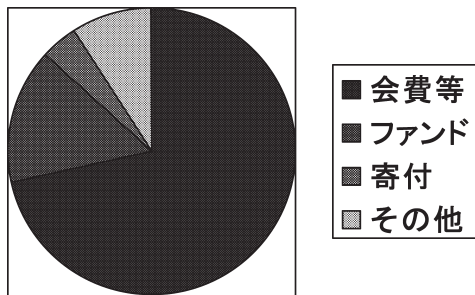
学会に比して、AAA の資金調達源泉のなかで特徴的なのは雑誌の購読料であろう。わが国の研究者も大いに貢献しているところであるが、学会が発行する数種類もの雑誌が世界に向けて販売されているということは、資金力の点でも、発信力の点でも、AAA の強みとなっている。他方で、CAAA の資金調達源泉のなかで特徴的なのはファンドや寄付金であろう。CAAA のファンドや寄付金がどこから拠出され、その見返りとしてなにが求められるのかは明らかではないが、CAAA の重要な活動資金源となっていることは事実である。

翻って、学会においても、将来的に、雑誌を販売したり、寄付を募ったりすることは可能であろうか。雑誌の販売を可能にするためには、その内容を相当に工夫・充実しなければならないだろうし、その編集業務に従事す

図表3 AAAの年間収入（\$3,127,439）の内訳²⁾



図表4 CAAAの年間収入（\$600,637）の内訳



る専門のチームが必要になるだろう。また、寄付の募集については、たとえば日本公認会計士協会や監査法人など外部機関との共同研究プロジェクトを立ち上げることも1つの案として考えられるが、日本公認会計士協会においても監査法人においてもそれぞれ内部に研究機関も研究に専念する優秀な人材もすでに抱えている現状を考えると、なかなか厳しいように思われる。学会については、まずは、会員の拡大を図ることが先決であろうか。

5. 国際ナショナル・アカウンティングへの再挑戦のための提言

これまでの海外における類似の学会との比

較を通じて、今後、学会は、どのような提言をしていけばよいのだろうか。考えられうる提言の方法および内容、そのために必要な環境整備について、検討をくわえることとする。

まず、考えられうる提言の方法についてであるが、1つは現行における学会の提言をより広く周知させるための方法、もう1つは将来的に学会の提言を拡大させるための方法の2つの観点から探ることにしたい。前者の現行における学会の提言をより広く周知させるためには、まずは年報（日本語版および英語版）を電子化し、外部者がネットを通じて容易に会員の研究成果を知りうる環境にするのがもっとも手っ取り早いであろう。この場合、あわせてHPの充実も必要となろう。後者の将来的に学会の提言を拡大させるための方法としては、研究を基盤とした国内外の基準設定主体への積極的なコメントが1つの案として考えられるだろう。この案を採用する場合、学会の研究成果を社会に還元する機会にもなるであろうし、社会のニーズを反映した研究も推進可能となるように思われる。ただし、学会から公表されるコメントの内容については、テーマごとに専門家チームを立ち上げ、相当に吟味されることが求められるであろう。

次に、考えられうる提言の内容についてであるが、1つはすでに公表されている会計基準または公開草案における会計処理に対する提言、もう1つは新たな会計基準設定の必要性を訴える提言の2つの観点から検討することとしたい。前者のすでに公表されている会計基準または公開草案における会計処理に対する提言について、複数の会計処理のオプションが想定され、かつ、複数の会計処理のいずれかが理論的に整合しない場合といずれもが理論的に整合する場合を考えてみると、学

会としては、いずれかが理論的に整合しない場合においては、その理論的問題点を指摘することができるだろうし、いずれもが理論的に整合する場合においては、それぞれの長短所を指摘することができるだろう。後者の新たな基準設定の必要性を訴える提言については、たとえば知的財産権をめぐる会計基準の設定を主張することも可能であろう。いずれにせよ、学会という立場からの提言は、あくまでもこれまでの研究成果の集大成として位置づけられるものであろうし、純粋に理論的であってほしいと思われる。

最後に、このような提言を可能にするような環境整備として、少なくとも、事務局のさらなる充実や各種専門委員会の設置が必要となろう。しかしながら、僅かな資金でどこまで実行可能となるかは未知数である。それぞれの会員のボランティア精神に委ねざるをえないというところであろうか。

6. おわりに

AAA・CAAAなど海外における類似の学会との比較を通じて、学会として将来的にどのような提言をなしうるかについて、いくつかの提案をおこなってきた。しかしながら、これまでの学会におけるさまざまな活動のなかでも十二分に素晴らしい提言が数多くなされてきており、このような貴重な研究成果を活かし、今後の国際会計研究の発展に繋げていくことこそが学会としてもっとも重要な任務であるように思われる。

【注】

- 1) 広瀬義州, 第22回国際会計研究学会年次大会
- 2) 内訳の「会費等」には主としてDuesおよびFeesが含まれ、「ロイヤルティ」とは電子ジャーナル化したさいに業者から支払われる契約料である。

海外における類似の学会についての言及および図表はすべて次の資料を参考とした。

The Accounting Review (Supplement を含む)
The Journal of International Accounting Research

<http://aaahq.org> (IAS・FASC・FASCCLのサイトを含む)

<http://www.caaa.ca/Home/tp//www.caaa.ca/Home>

<http://www.afc-cca.com/>

<http://www.eaa-online.org/>